

元 氣 の 源 通 信

目標設計・人事労務・社会保険事務手続き・助成金

社会保険労務士 深川順次

福岡市東区香椎4-11-17-201

TEL 092-661-0552 FAX 092-661-0582

(今月の言葉)

- ① 自分の力で走りぬけ
- ② 自立していれば、堂々として生きていける
- ③ 50歳を越えても「ツッパツ」で生きて行こう

(矢沢永吉)

2006年6月号(第51号)

「永ちゃん！」昭和24年生まれの団塊の世代。いまなお体を張り、汗を流して活躍しています。10万人の日本武道館公演(現在最多公演記録92回を更新中)を行ったかと思えば、全国の小さなライブハウスをまわり歌い上げる。団塊の世代の中で、もっともパワフルに活動し、大きな影響を与えている人物のひとりだといえます。先日NHKの特番で「永ちゃん」が取り上げられており、その影響力の大きさに驚きまた感銘を受けました。はっきり言って「にわかファン」になった。歌もいいし、考えもシンプルで心に響くものがあります。ということで今回は「永ちゃん」を取り上げました。なぜ彼はスーパースターとして存在し続けることができるのか、そしてなにをわれわれに問い続けているのか。

いけるところまで走りぬくよ

自分の力で走りぬけー パワフルにカッコよく

「走りぬく」いい言葉です。永ちゃんは『成り上がり』の中でも、「いけるところまで、走りぬくよ。それが、オレのオレたる存在証明だよ」とのべていました。『成り上がり』を書いたのは、永ちゃんが28歳のとき。ロックバンド・キャロルで一世を風靡し解散、その後ソロデビューをはたして長者番付にも登場したころです。いわば絶頂期だったといえます。

永ちゃんの最もカッコいいところは、その後約30年、信頼していた腹心の詐欺、横領(とくに2度目のオーストラリア事件では35億円の借金を抱え込んだ)やそれをめぐるマスコミからのバッシングなどの艱難に遭いながらも、それに負けずスーパースターの道を走り続けたことです。同時にちょっと成功してチヤホヤされても決して天狗にならなかった、自分自身に安住しなかった。常に前を向いて挑戦し続けてきたことです。そのパワフルさは近年でも衰えません。簡単にあげると

2003年、ディズニーアニメ「ピノキオ」の主題歌「星に願いを」を歌い上げ、ディズニー社から表彰される。

2004年、国内外のロックアーティストを集め、横浜国際総合競技場(現日産スタジアム)、大阪ドームでロック・オデッセイを開催、大トリを務める。

2005年、全国のライブハウスを回り、公演。

2006年、10月から12月までの2ヶ月間で、35回の公演予定(福岡でも公演予定有り)

いまやアーティストとしてはロック界の大御所。それだけではなくコンサートの演出なども取り仕切るプロデューサーとしても遺憾なく能力を発揮しています。

自立していれば、堂々として生きていける

永ちゃんの原点、それはなによりも「成り上がってやる」「絶対にビッグになる」という言葉に体現されています。『成り上がり』の冒頭でもつぎのようにのべています。

「成り上がり 大好きだね この言葉 快感で鳥肌が立つよ」

母親とは3歳のときに離別。父親は小学2年生のときに亡くなります。それでおばあちゃんに育てられますが、その生活は文字通り赤貧洗う生活だったといえます。何度も何度も何度も悔しい思いをした。何度も何度も何度も悲しい思いをしたともいえます。たしかに永吉少年は「悲しみのヒーロー」だった。しかし決して「いじけのヒーロー」にはならなかった。「絶対に金持ちになって見返してやる」この生活に「落とし前をつける」これが永ちゃんの原点だといえます。

同時に永ちゃんは、おばあちゃんからいろんなことを学んだといえます。おばあちゃんにはたくさんの子供がいた。しかし子供のやっかいにはならなかった。おばあちゃんは70歳をすぎても市役所の日雇いをして永吉少年を中学卒業まで育てています。

「本当に貧乏だったけど・・・誰に頼ることなく、自分の手で金を稼いで、それで食べていくのがいちばんカンファタブル」「本当に気持ちいいこと」だということを、おばあちゃんは教えてくれた。

2冊目の本『アー・ユー・ハッピー?』の冒頭で永ちゃんがのべている言葉です。これが同時に永ちゃんの原点だといえます。

自立の戦いは、アーティスト、スーパースターになってからも続きました。「いいステージをやりたい」「ファンをぶっ飛ばしたい。最高の気分させる、腹の底から納得させたい」ということで、今までの制作会社と手を切り、コンサート全体の制作も手がけるようになります。しかし初年度は大赤字を食らいます。制作会社の社長からはいやみたっぷりのことを言われますが、永ちゃんは決して負けませんでした。いいじゃないか、うけて立とうではないか!

「1回目、散々な目に遭う。2回目、落とし前をつける。3回目、余裕」

これもまた、永ちゃんの人生哲学です。

50歳を越えても「ツッパツ」で生きて行こう

永ちゃん! 50代半ばを過ぎても現役バリバリです。

「開き直って、オレは矢沢永吉を張って、とことん突き進んでやる」

「今オレが体で示していること、矢沢がやっていることは熟練のツッパリ」だ。

永ちゃんは言います。「熟年のツッパリ、おじさんのツッパリを見せてやれ」

永ちゃんの歌を聞けば、元気が出てきます。若いころのパワーを思い出すことができます。「負けずに頑張ろう」「走りぬくぞ」という気が起こります。50歳、60歳から勝負だという気も起こります。だから心身を磨きぬくぞという決意も新たにします。

永ちゃんもまたローリング・ストーンズを率いるミック・ジャガー(63歳)の背中を追っています。世界にはまだまだ永ちゃんを熱くさせるようなミュージシャンがたくさんいます。60歳を過ぎても「アイ・ラブ・ユー・OK」を熱唱したい。そのためにはもちろん体力が必要だ。しかしなんととっても悔しきだ。35億円の借金。クソくらえだ!(すでに完済したそうです。すごい!) 矢沢をみんな見ている。だから負けられない。

「オレは、プレスリーやモーツァルトのように悲劇のヒーローにはなりたくない」「勝って終わりにしたい」「そのためには・・・いいメロディを書き、いい音楽を作る。最高の年のとり方をして、最高にいいおっさんになってやろう」「オレも頑張るから、みんながんばれ」

これが『アー・ユー・ハッピー?』のメッセージです。

いま、激しく走るだけではない、「歩く速度の矢沢永吉」の魅力を自ら発見したともいいます。2002年「アコースティック・ライブ」の成功、これで「新しいドアを開けた」といいます。そして2003年ディズニー映画「ピノキオ」の主題歌『星に願いを』の熱唱。世界の矢沢は大人の世界を渋く歌い上げ、クラシック・ロックの境地を切り開いています。挑戦しています。

「選手は予想なんかしない。勝ちたい、ハッピーになりたいと思うからこそ、試合に出ているんだ。現役として」